



Title	＜新刊紹介＞信多純一著『馬琴の大夢 里見八犬伝の世界』
Author(s)	福田, 安典
Citation	語文, 84-85, p. 154-155
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69065
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

信多純一『馬琴の大夢 里見八犬伝の世界』

(二〇〇四年 岩波書店)

福田 安典

弟子にしてその師の著に言及ばんとする者を「痴れ者」と呼ぶのかもしれない。しかしながら、その「をこ」なる蛮行に人を誘うものは、学生時代に『八犬伝』の講義を受けたがゆえの甘いノスタルジアでは決してなく、また昨今の研究者に呪縛のように迫られる「すきま」原稿という強制でもない。それは本書を繙かれた者が「感得」することのできる「国文学」研究の醍醐味と、ある種の悔しさからにはかならない。それほど本書は魅惑的であり、挑戦的である。拙稿ではその錯綜する思いのまま、信多純一先生に言及する際に、「先生」「著者」の二者が混在することをまず著者たる信多純一先生にお詫びしたい。

「とりあえず」、「慣例」に従って本書の構成を挙げる。

第一章 玉梓の物語

「玉梓の怨死」「玉梓の祟り」「八房の物語」「伏姫の死と玉梓成仏」

第二章 玉梓の本性

「玉梓の位置付け」「役行者と玉梓」「馬琴の絵に対する姿勢」「馬琴の仕掛けた謎絵」「玉梓の神性―肇輯口絵第三図

について」「玉梓の由来」

第三章 肇輯口絵の謎

「馬琴読本口絵の謎」「第一図・第二図について」「第四図について」「絵にこめられた神性」

第四章 富山をめぐる

「雲霧晴るる所以」「富士山の本地」「『八犬伝』挿絵の異同」「伏姫は富士姫」「隠れ蓑・隠れ笠」

第五章

「日本開闢の事」「富士山庚申の涌出」「八葉」「琵琶湖」「九夏三伏」「役行者」「五色の玉」「徐福と不老不死薬」「聖徳太子と黒駒」「諸尊の石像・奇丸木」「富士と筑波」「金色女」「芦高の明神・犬飼の明神」

第六章 富士と『八犬伝』

「新田四郎」「曾我兄弟の夜討・十番斬」「人穴・清水」「胎内くぐり」

第七章 船虫の正体

「三悪党の毒婦船虫」「山の神船虫」

第八章 富士と馬琴

「馬琴の好尚」「『玄同放言』と『八犬伝』」「富士と仁」「馬琴と本地物」「馬琴本『富士山の本地』」

第九章 、大をめぐる

「、大の事歴」「、大の容姿」「、大の本性(その一)―肇輯口絵第七図について」「、大の本性(その二)」「孝

徳・大の筆輯口絵―第五図・第六図について―

第十章 筆輯口絵の構造

「口絵七図と稗史七法則」「封神演義」と『八犬伝』

第十一章 『八犬伝』夢世界

「八犬伝世界からの覚醒」「雲霧晴れ純陽の花消ゆ」

第十二章 『八犬伝』の構造

「善悪三玉の行方」「八犬伝」と『西遊記』『八犬伝』の構造と『西遊記』『悟道の書』『西遊記』

むすび

先に「とりあえず」と「慣例」という括弧付きの冠を戴したが、実はこの構成から著者の『里見八犬伝』に対する研究のスタンスが十分に看取できるので、単なる「慣例」による列記ではない。というのも、この構成は馬琴先生よろしく構成にも細心に意を尽くして「伏線」「隠微」（一般的な物言いではなく、先生が解明された馬琴のそれ）の構造の綾に織り込まれた計算されつくした緻密な構成ではないのである。この構成は著者にとって馬琴研究の深化の道程の順である、という話を直接伺った。弟子であるよりも著者の第一ファンであることを勝手に自認してきた自分にとって、そのお言葉はある意味で衝撃的であり、ある意味ではあまりにも首肯できうるお言葉であった。確かに、著者の絵画に対する他の追隨を許さぬ洞察力に、厳しいまでの博引傍証によって、次々と神々が降臨し、『八犬伝』を支える『富士山の本地』『曽我物語』の世界が展開され、『八犬伝』は読み解かれていくのであ

るが、本書を単なる「謎解き」というレベルで収めていない強さは、その後半部にある。当然のことながら、馬琴は中国小説に精通していたが、その中国小説の『封神演義』や『西遊記』との関係について触れられた章については、第一に中国小説に「正面」から取り組まれた点に敬意を表さざるを得ない。その「正面」というのは、単に『八犬伝』のこの部分の典拠や発想が中国小説のこれこれにある、というような浅薄な指摘ではない。「正面」とはまさに「正面」であって、単なる表面の類似を撫でるのではなく、その思想性そしてそれが馬琴の内部で深化し醸成されていき、馬琴自身の「物を書く」という作家内部の心の壁にまで筆が及んでいる、という意味である。その心の壁への追及は、馬琴の「莊子」や仁齋理解にまで及んでいて、作家の「学問」とその表出としての作品という、文学の王道でありながら、現在の研究では何か置き去りにしてしまった、いわば作品の「核」というべき「文学論」が見事な筆致で描かれているのである。

本書によって、『八犬伝』のすべての謎は解かれただけではない。真の「文学」作品がその荒ぶる魅力をふりまいてわれわれの現前に登場しただけである。書き残したことがあまりに多い。その書き残した部分が次代の文学研究の糧となると自戒しつつ、新刊紹介と呼ぶにはあまりの無文を連ねてしまったことを羞じながら筆を置きたい。

―愛媛大学教育学部助教授―